

村山神社



長津小学校の南400mほどのところに、天照皇大神と斉明天皇・天智天皇を祭る村山神社がある。

本校がある土居町津根の歴史は古く、709年の河内国古市郡西琳寺文書に「伊予国宇麻郡常里の戸主である金集史挨麻呂（かねあつめのふひとやからまる）が、弟の保麻呂（やすまる）を大和国飛鳥寺（やまとのくにあすかでら）で受戒させ、名前を願忠と改めた。」という記録が残されている。「常里」とは現在の土居町津根のことである。

その津根の中心にあるのが村山神社である。延喜式内大明神の一つで、古来より、西国33カ国の人々は、下参宮と言って、当社を参拝することで伊勢神宮の参拝に代えていたといわれる。

境内にあるホルトノキは、樹高30m、目通り5.7m、根回り24mで全国でも最大級のホルトノキと言われ、市の天然記念物に指定されている。

村山神社と磐瀬行宮（いわせのかりみや）

村山神社には、663年、斉明天皇が白村江の戦いに向かう際に立ち寄った、磐瀬行宮（いわせのかりみや）であったという言い伝えが残されている。

斉明天皇一行の九州遠征について、日本書紀には、斉明天皇七年の項に「七年春一月六日、天皇の船は西に向かって、航路についた。八日、船は大伯（おおく）の海についた。（中略）十四日、船は伊予の熟田津（にぎたつ）の石湯行宮（いわゆのかりみや）に泊まった。三月二十五日、船は本来の航路に戻って、娜大津（なのおおつ）についた。磐瀬行宮（いわせのかりみや）にお入りになった。天皇は名を改めてここを長津とされた。（後略）」と書かれている。

長津地域には、斉明天皇や中大兄皇子に関する伝承も残されており、拝殿前にある宝塚は斉明天皇百済救援の折の御陵所とも言われている。東宮には、天智天皇衣がけの石があり、東宮から村山神社に通じる御車道（みくるまみち）があったという。